

赤穂時代の葉山嘉樹書簡二通

浦西和彦

「南信新聞」赤穂支局に勤めていた中野亨のご遺族・中野啓次郎より、葉山嘉樹に関する資料を拝借した。葉山嘉樹の中野亨宛書簡二通と質札一枚と雑誌「信州文化」第二巻一号等である。中野亨宛の葉山嘉樹書簡は、『葉山嘉樹全集』第六卷（昭和五十一年六月三十日発行、筑摩書房）の「書簡」の部に収録されていなく、未発表書簡であるので、この機会に紹介しておく。

葉山嘉樹は、昭和九年一月六日、三信鉄道（現在、JR飯田線）敷設工事に従事するため、家族を東京に残し、林部夫妻、広野八郎らと共に、長野県下伊那郡泰阜村明島に赴いた。飛鳥組錦龍配下中川百助の帳付けとなったのである。三信鉄道工事の請負者は飛鳥組組長の飛鳥文吉で、部長は熊谷三太郎（のち熊谷組を設立）であり、名義人は錦龍益太郎である。施工主の三信鉄道には資金がなく、飛鳥組には仕事なかったため、飛

鳥組が工事費を無理して一時立替えて取り掛かった工事であった。そのため、その皺寄せが働く人々にもろに覆いかぶさってくる。葉山嘉樹と同行した広野八郎は『葉山嘉樹・私史』（昭和五十一年六月十日発行、たいまつ社）で、当時を振り返り、「給料は無い月もあり、あっても五分勘定か六分勘定、わたしたちも小遣い程度で、満足の勘定を受取った月はなかった」と回想している。葉山嘉樹は家族へ送金することが出来なく、二月十日に、妻子を泰阜村明島の飯場に呼び寄せるのである。だが、七月上旬には、中川百助と衝突し、三信鉄道工場から手を引く。そして、葉山嘉樹は、赤穂村の同人雑誌「群衆」の同人、片桐千尋、原義根らの世話で、九月二十七日に長野県上伊那郡赤穂村一九四八へ移住した。その家は、中川という医者のかた家で、「十、八、六、八、六、六、十五、と云ふ風に畳を敷いた室の外に、板張りの室が四五室」もあるという「どえらい家」

（『葉山嘉樹日記』）であった。伊那一円の海産物問屋の小出小三郎が貸りていた家に一時入ったのである。この引越した昭和九年九月二十七日から、昭和十三年一月十三日頃に岐阜県惠那郡中津町西新町の妻菊枝の実家に移転するまで、葉山嘉樹は二年余りを長野県上伊那郡赤穂村で過ごしたのである。この赤穂時代は、数え四十から四十五歳までであり、葉山嘉樹が円熟した作家的活動を示した時期でもある。「山谿に生くる人々」「水路」「人間の値段」「結婚式」「紐のついた命」「窮鼠」「裸の命」「万福追想」などの秀作を発表し、それらは文字通りのプロレタリア小説である。赤穂時代の葉山嘉樹の作品には、まだ文学的転向がおとずれていない。赤貧洗うような生活が苦しいなかで、必死になってプロレタリア文学をあくまでも堅持して、いこうという姿勢で貫かれている。

さて、ここで葉山嘉樹の中野亨宛書簡の全文を、次にあげておく。

書簡一

封書。封筒表には「中野亨兄／葉山」とペン書きがある。封筒裏には「長野県上伊那郡赤穂村／葉山嘉樹」と印刷され、「五月二十九日」と執筆日がペン書きされている。

本文は「葉山嘉樹用」と印刷された四百字詰原稿用紙一枚にペン書きされている。

新聞の発行は如何になりましたか。早く成功を祈ります。東京市会と、今度の総選挙の応援で、一ヶ月遊んでしまつて、その結果、今、赤貧洗ふが如しです。

明日、電灯料を決算で取りに来ると云ふがその金が無いのです。済みませんが、五円位借して貰へないでせうか。もし、兄のお手元にあつたらですが。

「報知」に原稿を書いたんですが、もし、兄の目に留つたら、御一報願ひ度いんですが。稿料を催促する為に！

右お願ひのみ。

五月二十九日

嘉樹

中野 亨 兄

書簡二

便箋五枚にペン書きである。封筒は存在しない。

鳥ノ木の、元僕の居た家の附近に空家が出来た。

カネ三の空家ださうである。

小出君に、僕又は、小出君の名義で、借りて貰ふやうに奔走してゐる。

うまく借りられ得たらば、そこで暮してゐて、よい家を、そのうちに見付けるやうにしたらいいと思ふ。

借りれる借りれないは時の運である。君も、もし、こちらで借りるのに失敗した場合は、その家を借りることに、奔走して貰ひたい。

小出君も、窮境にゐる。君も亦窮地である。お互に、自分の事ばかり考へてゐてはいけないと思ふ。

万事、円満に解決したい。

努力を乞ふ。

嘉樹

中野 兄

追信

もし借りられない場合は君に、犠牲的な、非常時の態度を取つて貰ひたい。小出君は下宿代を出す時まで云つてゐるが、それは僕として、『どうぞお願いします』とも云へない。それは兄も十分御推察の事と思ふ。

何分、十全なる解決を乞ふ。

この書簡一、二は、ともに人にことづけたものであらう。郵便局の消印がない。そのため、何年に差し出した手紙であるのか、明示されていない。

書簡一には「五月二十九日」と差し出しの月日が明記されている。それは何年の「五月二十九日」であるのか。文面に「東京市会と、今度の総選挙の応援で、一ヶ月遊んでしまつて、その結果、今、赤貧洗ふが如しです」とあるので、昭和十二年であらう。葉山嘉樹は、東京を離れてから異常なまで選挙応援に熱中したのが昭和十二年である。昭和十二年三月一日に、赤穂村より上京し、荒畑寒村、青野季吉、三輪盛吉等の家に宿泊しながら、半月余りも、鈴木茂三郎、小堀甚二、三輪盛吉、中西伊之助等の東京市議選挙を応援したのである。『葉山嘉樹日記』昭和十二年三月二十三日に「東京市議戦〈選〉」応援に約十六七日間を費して、鈴木茂三郎、加藤勘十、安平鹿一、等当選、三輪君落選。『数日前帰宅』と記している。東京市会議員選挙だけを応援演説したのではない。このあと翌月には、十五日より二十日まで、松本市に赴いて、棚橋小虎の選挙応援をし、更に、四月二十五日より五月五日まで、旧文戦派の鶴田知也、伊藤永

之介等と共に九州へ行き、総選挙に立候補した三浦愛二の応援に駆け回り、八幡市などで応援演説をするのである。これらの事実から書簡一は昭和十二年であると断定していいであろう。

そして、『葉山嘉樹日記』昭和十二年五月三十日に、「朝中野君に金借りに行く。金指輪を質に入れ二円貸してくれた。どこも困つてゐる」とある。書簡一に出ている「報知」に原稿を書いた」という原稿は、「六月二十八日」の『葉山嘉樹日記』に「報知から又原稿が帰つて来た。林内閣がつぶれたので又原稿がくさつたのである」とあり、この原稿は掲載されなかったやうだ。そのため葉山嘉樹は「村の白痴の思ひ」（「報知新聞」昭和十二年七月十一、十三、十四日）を新たに書いたのである。

書簡二には、書簡一のような執筆月日も封筒もない。文中の冒頭に出てくる「鳥ノ木」というのは地名である。「鳥ノ木の、元僕の居た家」とあるので、葉山嘉樹が住んでいた「鳥ノ木」から移転した後の手紙と見なしていいであろう。中野啓次郎によると、鳥ノ木は、当時、赤穂村西保町で、現在は駒ヶ根市上穂栄町八ノ一で、中野啓次郎の家であるという。さきに記したように、葉山嘉樹は昭和九年九月二十七日に秦阜村明島の飯場から、赤穂村一九四の中川医院跡の「どえらい家」に一時移住した。このあと葉山嘉樹は昭和九年十月二十九日に赤穂村の鳥

の木の高橋医院跡に引越した。この鳥の木に葉山嘉樹が住んでいたのは昭和十年十一月六日までであり、翌日には赤穂村竜生町に移住している。書簡二に「鳥ノ木の、元僕の居た家」とあるので、昭和十年十一月以後の手紙であると判断される。そこで『葉山嘉樹日記』を見ていくと、昭和十二年六月七日に、次のような記述があった。

中野君がやつて来て、今日明日の中に家を明けなければならんと云ふ。

小出君に会ひ、取（鳥）ノ木の方に家が空いてると云ふので、その家を借りる交渉に行つた。糸屋と云ふ餅屋である。

小出君夜九時、名古屋に出発。三円借りた。

翌日の六月六日の『葉山嘉樹日記』には、次のようにある。

家を貸してくれることになつた。中野君へ知らせる。

ゴタ／＼にくさつたので、簀を買つて、太田切の下流へ釣りに出かけて、一尾も釣れなかつた。

書簡二は、この『葉山嘉樹日記』の記載から昭和十二年六月七日に書かれたものと思われる。

中野啓次郎は、この二通の書簡以外に、次の質札を所蔵されている。

第一四七二号 質 札

長野縣上伊那赤穂村大字赤穂一四七八四番地

昭和十二年十一月廿日

扇屋 矢沢 質店

電話 五五番 二一八番

一金拾八円也

一割引拾参円壹枚

一金指輪壹ヶ

貳品

葉山嘉樹殿（受戻シハ本質札引換ニ付必ズ御持参下サイ 質

札紛失スハ御移転ノ節ハ即時御報知下サイ）

（毎月 第三 日 曜 日 休 業）

この質札に関しては、『葉山嘉樹日記』昭和十二年十一月三十日に「中野君金指輪と債券を持つて来て質屋に行つてくれと云ふ。十八円貸した。届ける」とある。葉山嘉樹が中野亨の代理で質屋にお金を貸り行ったのであろう。『葉山嘉樹日記』昭和十一年四月十四日にも、中野亨と質屋に係する記述が「朝、中野君んちへ行き質が流れさうになつてゐる話をして、帰りに矢沢に待つてくれるやうに頼んで家に帰る。／午後、釣に行き鮠三尾。北風寒く出たので、ダメ。／夜、中野君質利子二円五十錢持ち来る」、四月十五日「矢沢質店へ、中野君の質の利入れ

に行く」とある。質屋に顔のきく葉山嘉樹に中野亨は入質を依頼したのであろう。

書簡一にある「新聞の発行は如何になりましたか」という「新聞」は具体的になにを指しているのであろう。「南信新聞」赤穂局に勤めていた中野亨は、「南信新聞」とは別に、文化新聞の発刊を昭和十一年頃に企画していたようだ。葉山嘉樹は、中野亨のために文化新聞の基金集めのための色紙依頼の趣意書を書いてゐる。『葉山嘉樹日記』昭和十一年四月一日に「色紙集めの趣意書を書いて中野君とこに行つた」とあり、四月二日には「中野亨君、文化新聞の基金集めの色紙依頼の印刷を持つて来る。五十錢借りる」とある。この時の趣意書や、中野亨が発刊しようとした文化新聞など、実際に出たのであろうか、どうか調査する必要がある。もし文化新聞が刊行されておれば、そこに葉山嘉樹はなにか執筆している可能性もある。

中野亨と葉山嘉樹の著作に係して触れると、『葉山嘉樹日記』昭和十年一月九日の記述にある「南信新聞に三枚許り書き中野君に届ける」とある「原稿」は、青野季吉の「離京現象に就て」（『東京朝日新聞』昭和九年十二月十九、二十一日）に反論した「時代を思ふ」（『南信新聞』昭和十年一月十三日）である。それは『葉山嘉樹全集第五卷』（昭和五十一年二月十日発

行、筑摩書房」に収録されている。しかし、『葉山嘉樹日記』昭和十年三月十六日に、次のようにある「三枚許り書いた」原稿はどういうものであつたか。

甲州国境、満ソ国境以上に紛る。

東郷大将孫娘十七日間、喫茶店の女給となつて社会を見た。

雨で室内暗く、一日クサツちやつた。甲信国境釜無川を距て、土地所有権争ひをやつてゐるので、満ソ国境を結びつけ三枚許り書いて、中野君の家へ届け、小出小三郎君を訪ねたが不在であつた。

また、『葉山嘉樹日記』昭和十一年十月二十七日に、次のようにある。

「時事」にでも送らうと随筆四枚書いたら、中野君がやつて来て、伊那毎日に載せるからと捞いで行つた。少し金を貸してくれるやうに頼んどいたが、同君も困つてゐるのが常習だ。

これらの葉山嘉樹の著作を探し出す必要があるであらう。昭和十二年七月七日、蘆溝橋で日中両軍が衝突し、日中戦争に突入していった。葉山嘉樹の文学的転向を考へる場合、その前後の著作を丁寧に見ることが大事であらう。『葉山嘉樹日記』昭和十二年十月三日に「前途暗澹である。原稿の依頼皆

無。時世悪しく我のみならず致し方無し」とある。文筆で生計をたてている者にとって、「原稿の依頼皆無」といった状況に追いやられたのである。日中戦争下に突入した昭和十二年のジャーナリズムは、左翼的であつた「改造」や「東京朝日新聞」などが、先頭に立つて一斉に右翼的、国家主義的に変容していったのである。葉山嘉樹は昭和十一年十月二十日の日記に、次のように記している。

頃日、子等にもワイフにも頭上らざる気持なり。

いよ／＼落合川に行つて百姓で暮す決心なり。それ以外に食ふ道なければなり。

理想とは将来大いに楽に食ふことである。即ち今は食へない状態を指す。

林房雄輩をやつつけねば腹収まらざる心地なり、されど、林輩をやつつけることがわが仕事にあらざることを悲しく思ふ。

チンピラ仲間ペン曲藝師共をして踊らしめよ。

俺の如きは歴史の動きに對しては、一匹の蟻か一尾の鮠の如きものなのだ。

子等よ健に育て！

父の如くなるなかれ。

改造送り来りあれども散読すら厭なり。まして朝日新聞の如きに於てや。

ジャーナリズムの骨なさを痛恨なり。

戦争は日毎に拡大していき、日本軍は昭和十二年十二月十三日に南京を占領する。十二月十五日には、山川均、加藤勘十、荒畑寒村、大森義太郎ら労農派など四百人余りが検挙された。いわゆる第一次人民戦事件である。葉山嘉樹は同年十月二十三日の日記に「全身より気力失す。／風船玉の萎むやうに、わが頭より生活力と未来への希望、何の故か飛び去る」といった心情を記している。時局の悪化により、文筆だけでは生活が維持することが出来なくなり、赤穂村を去り、妻の実家を頼って岐阜県へ移住していったのである。葉山嘉樹の転向は思想的・政治的な弱さと一刀両断に切りすててしまつては、昭和という時代や社会はなにも見えてこないであろう。赤穂時代の葉山嘉樹の資料の発掘や葉山嘉樹の赤穂時代の作品をもっと論じることが必要ではないかと思う。

(うらにし かずひこ／本学教授)